



# 教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano (郵局) 111・三四五二 芦屋市船戸町12-6  
©1985 精道教育促進協会

## ご聖体 家族の愛の源

「もし一粒の麦が地に落ちて死なぬなら、ただ一つのまま残る。しかし死ねば多くの実を結ぶ。(ヨハネ12・24)」

主イエズスが自分の死を考えたお話しになったお言葉を読んだところです。イエズス御自らまずいちばん最初に「地に落ちて死ぬ」あの「一粒の麦」になられました。御父と全く同じ実体であられる御子、神よりの神、光よりの光であられる神の御子が、人間となり、ナザレトの処女マリアの息子となって、普通の男女の生活の中にお入りになり、最後に世界中の罪のための犠牲となって、十字架にかけられて死ぬことをお引き受けになったのです。この麦の粒は、まさにその通り、死んで多くの実を結びました。世の贖いという実り、靈魂の救いという実り、神の中で永遠の生命を始めるための真理と愛の力という実りを。一粒の麦のたとえ話はこうしてキリストの秘義そのものを平易に説明してくれま

す。このように、キリストの語られた麦の粒のたとえ話によって、私たちはご聖体の秘義を容易に理解できるわけです。事実、最後の晩餐のとき、キリストは御みずからパンをとり、祝して仰せになりました。「皆これをとって食べなさい。これはあなたたちのために渡される私の体である」と。そののち秘跡的にご自分の御体になったパンを裂き、使徒たちに分け与えられます。

同じようなやり方で、主はぶどう酒を御血に変化させ(全実体変化)、使徒たちに与えて仰せになりました。「みなこれを受けて飲みなさい。これは私の血の盃、私の新しい永遠につづく契約の血である。多くの人のために、罪の赦しを得させるために流す私の血である」と。それから「私の記念としてこれを行なえ」とつけ加えられました。

これがご聖体の秘跡を通してキリストの秘義が私たちのうちにとどまられるやり方です。私たち皆のためにご自身をお与えになり、十字架の犠牲となって御体と御血をおささげになる世の救い主の秘義であります。ご聖体のおかげで贖い主のお言葉は実現しました。「私

はあなたたちを孤児にはおかない、ふたたび帰って来る。(ヨハネ14・18)

この秘跡を通して主はいつも私たちのところへ来てくださいます。私たちは孤児ではありません。主が共におられるのだから、ご聖体を通して、主は私たちに主の平和をもたらししてくださいませ。私たちが自己の弱さや恐れに打ち勝つように助けてくださいませ。主が予告なさったとおりです。「私はあなたたちに平和を残し、私の平和を与える。私はこの世が与えるようにしてそれを与えるのではない。心配することはない。恐れることはない。(ヨハネ14・27)」

このようにわけで、最初から、十字架につけられよみがえられた主の使徒と証人は、使徒たちの教えること、兄弟的な一致、パンを裂くこと、祈りをするに専念した(使徒行録2・42)のです。彼らは「パンを裂くこと」を信心深く行なっていました。つまり、ご聖体は彼らの生活のまさに中心を、共同体の生活の中心、教会の生命の中心を、構成していたのです。(…)

聖体大会のメッセージにはご聖体の秘跡そのものと同様、愛への招きが含まれています。主が十字架で私たちのために生命をお与えになる前日の夕方、最初の「ご聖体のときに、救い主は弟子たちに仰せになりました。「私は新しい掟を与える。あなたたちは互いに愛し合え。私があなたたちを愛したように、あなたたちも互いに愛し合え。互いに愛し合うなら、それによって人はみな、あなたたちが私の弟子であることを認めるだろう」と。(…)

この聖体大会においてキリストはふたたび私たちを愛へと招いてくださいました。その招きは何をおいてもまず第一に、キリスト信者の家庭のためであります。家族のメンバー一人ひとりに向かって、主は話しかけておいでになります。妻たちよ、キリストがあなたたちを愛されるように夫を愛しなさい。夫たちよ、キリストが教会を愛し、そのために生命を与えられたように、あなたたちも妻を愛せよ。(エフエソ5・25)「子供たちよ、主において両親に従え、―それは正しいことである。…両親よ、あなたたち



Merry Christmas

の子供を怒らせることなく、主に従って規律をもって育て戒めよ。(エフエソ6・1、4) ナザレトの聖家族をお手本にしてください。マリアの清さと愛すべきやさしさ、ヨセフの忠誠と正直さ、毎日の仕事に対する寛大な心、イエズスの謙遜と従順とを。

キリストのこの愛への招きは、夫婦愛の実行に特に関係があります。(…) 夫婦の愛は実り豊か。その豊かさは特に子供たちにあられ、一人ひとりの子供たちを、より一層寛い心で互いに愛し合えと招くのです。

子供一人ひとりに、食事を与え、着物をきせ、世話をやくのは、大変な犠牲を要するきびしい仕事です。その上両親には子供たちを教育する義務があります。(…)

自己を与えるという最も親密な表現方法からみれば、夫婦の愛は独占的である一方、子供を寛大に喜んで迎え入れる力を示し、さらにあちこちに拡がった家族の成員、地域共同体、ひいては社会全体に対する世話や奉仕といった活動にまで拡がるはずです。(…)

キリスト信者の家庭は、摂理によって、神と語り合う共同体であります。それゆえ、祈りと秘跡が家族生活の中で卓越した地位を得なければなりません。

何よりも大切なのはご聖体であり、ご聖体において、教会と結ばれたキリストの愛の契約が祝われ更新されます。また、夫と妻が自分たちの結婚の契約に力を見出し養われるのもご聖体においてなのです。

## 信仰と道徳 シリーズVI

# 神の啓示の伝わり方

1 私たちが確信の上、自由に、信仰によって受け入れるように神が啓示なさった事柄は、どこに見つけることができるでしょうか。

第二バティカン公会議は次のように教えています。「聖伝と新旧両約聖書は、いわば鏡のようなもので、地上を旅する教会は、『神があるがままに、面と面とを合わせて相見るときまで』(ヨハネ①③・②参照)、すべてのものを賜りながら、その鏡の中に神を見るのである。(『神の啓示に関する教義憲章』(以下啓7))

右のような説明で公会議は、信者一人ひとりにとって大切な神の啓示の伝達についての教えを要約しています。永遠に面と面とを合わせて神を見るために歩む道、その道をととのえてくれる「クレド」(使徒信経)は、イエズス・キリストにおいて頂点に達し完成された啓示、つまり神の自己啓示を、いかに忠実にかつ正確に伝えるかにかかっています。

2 キリストご自身は「使徒たちに神のたまものを与えて、これを救いに關するあらゆる真理と道徳の源として、すべての人にのべるように命じた。(啓7) 使徒たちは任せられた使命をまず自分の口で宣布したが、同時に彼らのうちのある者は、「聖霊の神感により救いの知らせを書き物にした。(啓7) マルコとルカも同じことをしました。

神の啓示はこうにして初代の信者に伝えられました。「使徒たちは、生きた完全な福音が常に教会に保存されるよう、司教たちを後継者として残し、かれらに『自分たちの教導職』(聖イレネウスの表現)を与えた。(啓7)

3 すでにみたように、公会議の教えによると、聖伝と聖書とは、教会内における啓示の伝達において互いに補い合い互いに完成し合っています。聖伝と聖書から、キリストの新しい世代の弟子や証人たちは榮養を得ます。

告解の秘跡は、家族の成員に、回心に必要なら恩寵や、罪が家族にもたらしたどんな不和にも打ち勝つことのできる恩寵を与えます。(…) 祈りはすべてのキリスト信者の人生にとって絶対に欠くことのできないものですが、家族で唱える祈りには特別な意味があります。

一緒に祈るわけですから、それぞれの家族の大きさや構成に応じてその形があり、内容も決まってきます。共に唱える祈りほど家族に深く影響を及ぼす活動はほかにありません。祈りは神に対する敬いの心を育て、お互いに尊敬し合うよう促します。祈りがあれば、喜びと悲しみ、希望と落胆、すべての出来事や状況を、神の慈悲と摂理という全体の中で、なごめることができるのです。こうした祈りは、

「実際、使徒たちから伝えられたことは、神の民が聖なる生活を営み、かつ信仰を強めるのに役立つすべてのものを含んでいる(啓8)からです。

「この使徒たちから出る聖伝は、教会において聖霊の援助によって進歩する。実際、伝えられた事物やことばの理解は、それを心の中で思いめぐらす(ルカ2・19、51参照)信者たちの黙想と研究によって、あるいは靈的なことばらについての体験の深い理解によって、あるいはまた、司教職の継承とともに真理の確かなたまもの(カリスマ)を受けた人たちの宣教などによって、深くなる。要するに、教会は、自分に神のことばが成就するまで、時代の推移に伴って、絶えず、完全な神の真理を目ざして進むのである。(啓8)

神の啓示の充満に向かう教会はたえず、元の唯一の遺産に頼っています。すなわち、「同一の神の起源をもち、ある程度一体をなし、同一の目的に向かう」聖伝と聖書に依存しているのです。(啓9)

神のおことばそのもの

家族のメンバー一人ひとりの心をイエズスの聖心に開かせ、家族がもっと一致するよう助け、さらに教会と社会に奉仕できるよう準備させてくれます。

ご聖体は生命の秘跡であります。人間の靈魂を神の生命で満たし、永遠の生命を約束するものだから。ご聖体を通して、キリストはいつも、受難と死の前夜におおせになったお言葉を私たちに語りかけられます。「私の父の家にはすみかが多い…。私はあなたたちのために場所を準備しに行く。そして行って行くために帰って来る。私のいる所に、あなたたちも来させたいからである。(ヨハネ14・23) (…)(一九八五・八・十八 明会のミサの説教で)

4 この点については公会議の言葉を引用してはつきりさせておきましょう。「教会は聖書だけから啓示されたすべてのことについて自分の確信を得るのではない。(啓9) 聖書は「聖霊の神感によって書かれた神のおことばである。そして聖伝は、主キリストと聖霊から使徒たちに託された神のおことばを余すところなく後継者に伝え、後継者たちは、真理の靈の導きの下に、説教によってそれを忠実に保ち、説明し、普及するようにするものである。(啓9)」「また聖伝によって、聖書の諸書の完全な正典が教会に知られ、その中で聖書そのものが深く理解され、たえず活力にあふれたものとされる。(啓8)

「聖伝と聖書とは、教会に託された神のことばの遺産(源泉)の一つである。この遺産によって、その牧者とともに聖なる民が使徒たちの教えに忠実を保つ。(啓10) 従って、聖書と聖伝は信仰と愛の心で受け入れられ、たえられねばなりません。

本もの解釈

5 (…で、書き記された、あるいは聖伝に

本もの解釈

よって伝えられてきた神のおことばの解釈の問題がでてきます。この解釈の仕事は、キリストの名によって権威を行使する教会の生きた教導職に任せられている。(啓10) この教導職は「神のことばの上にあるのではなく、むしろ、これに奉仕し、伝えられたことだけを教えるのである。すなわち、神の命令と聖霊の援助によって、神のことばを敬虔に聞き、堅く保存し、忠実に説明し、そして信すべき神の啓示として宣言するすべてのことを、信仰のこの唯一の遺産(源泉)からくみとるのである。(啓10)

6 ここに信仰のもう一つの特徴が出ています。すなわち、キリスト教的に信じている教会が教えるままの神の啓示を受け入れることとは、第二バティカン公会議の「教会憲章」には次の点も明らかにされてあります。「信者の総体は信仰において誤ることができない。この特性は『司教をはじめとしてすべての信徒を含む』信者の総体が信仰と道徳の事からについて全面的に賛同するとき、神の民全体の超自然的な信仰の感覚を通してあら

われる。事実、真理の霊によって起こされ、ささえられているこの信仰の感覚(Sensus fidei)によって、また聖なる教導職——これに従う者はもはや人間のことはではなく真に神のことばを受ける(テサロニケ①2・13参照)——の指導のもとに、神の民は、ひとたび聖徒たちに伝えられた信仰を(ユダ3参照)傷つけることなく守り、正しい判断によってその信仰を一層深く掘り下げ、それを生活のうちにより完全に具体化してゆくのである。」

7 聖書と聖伝と教会の教導職、さらに神の民全体の超自然的信仰の感覚が一緒になって、神の啓示を伝達するための生ける道すじとなります。「このようにして、かつて幾度か語った神は、不断に愛する御子の花嫁と語り、福音の生きた声は聖霊によって教会に、また教会によって世界に響き渡り、そして聖霊は、信する者をすべての真理に導き、かれらのうちにキリストのことばを豊かに宿らせるのである(コロサイ3・16参照)」。キリスト教の信仰とは、聖霊に導かれて、意識的かつ自由に、完全な真理に至ることなのです。

みなさんが獲得し、かつ深めようとなさっている知識には、自然について、そして人間についての全知識が含まれています。大学は自然科学や精密科学に始まりあらゆる研究と技術応用に門戸を開いています。みなさんの国はあらゆる分野、とくに健康、開発、工業農業、電子工学、調和のとれた社会の組織などの分野で、専門家を必要としておいてなる。みなさんが担っておられるのは、お国の人間の発展のための仕事であります。けれどもこの実利面より先に、偉大な科学的仕事のあることを忘れてはなりません。すなわち、(真理の探究)。真理とは探究されるべきであり、全く自由に、知るよろこびのために、それ自体愛されるべきものです。この探究に当たり、人間の知性の力、言うならば全ての被造物の名をつける力(創世の書? 19-20参照)が発揮されます。被造物の秘密をできるだけ探る、とくに人間とその言語、存在、運命の社会的意味の神秘をより深く研究する力が。

的(精神的)諸現実の深い意味を探る学問です。哲学のおかげで人間の個人的生活の倫理が定まってきました。ユネスコで申し上げたように、「第一にして根本的な文化的事実は精神的に成熟した人間、すなわち、十分な教育を受けた、自らを教育すると同時に他者をも教育しようとする人です。文化の第一にして根本的な次元とは健全な道徳、道徳文化であります。(啓12)

される宗教的事実を深く研究しなければならぬという理由です。このような研究がなされれば、伝統を誇る宗教的価値そのものと、それらの価値が確立する社会的絆を十分に考慮することになり、ひいては、将来の文明が魂を保つことができるのです。聖書を読むと詩篇作者の確信が見られます。「主が家を建てられないなら、それを造る者の働きは空しい。(詩篇127:1)(…)」

り去るのが福音の使信なのです。外国人が信仰と共に持ち込んだある種の習慣だけでなく、みなさん方の間に見られるある種の習慣や制度についても、このような義務を果たさなければなりません。さらに神の福音は、全てよきもの、高貴なもの、真なるもの、正義にかなうものが、最良のものを与えるよう救い、刈り込み、広げる、つまり(清めかつ高め)なければならぬのです。(…)」

## 文化に福音の刻印を

は、何が本質的か、人間にとって何が本物で何が良いのかを見分けると同時に、進歩の不明瞭な点、文明を眩惑させる畏、誤りや偽りの価値、効果的であると主張する唯物(物質)主義やイデオロギーの誘惑などを批判的な目で識別しなければなりません。

要するに、文明の歴史が証明し、かつまた私が確認する事実は、宗教と文化との間に有機的の本質的な関係があるということです。(ユネスコでの演説啓9参照) そしてこの事実こそ、人間と超越性とのよい関係として尊重

文化の受肉(インカルチュアレーション) キリスト教の信仰は全ての民にとって本当によき音信でなければなりません。(…) 福音宣教によって諸文化の要素に刻印をおさなければならぬのです。(…) というわけでインカルチュアレーションのための絶え間ない努力は、信仰が皮相的な面にとどまることのないよう続けられねばなりません。ここで、同時に忘れてならないのは、福音の使信が人間のものを単に堅固(強固)にするために来たのではないという点です。福音の使信は預言的、批判的役割をになっているからです。

徒信経がいかに生き続けてきたか、言いかえるなら、個々の歴史を通してどのように、聖霊と教導職と共に歩み続けてきたかがわかります。しかし同時に人間の心と精神の、つまり普遍的な経験である信実の問いかけに応えてきたことも明らかにあります。(一九八五・八・十三 カメルーンの学者や科学者たちに)

科学が含まれていますが、今日はそのなかでもとくに哲学を取り上げて考えてゆきたいと思えます。哲学とは、物質の世界を越えた現実、すなわち、人間の存在にとっては本質

ある。(啓10) ここに信仰のもう一つの特徴が出ています。すなわち、キリスト教的に信じている教会が教えるままの神の啓示を受け入れることとは、第二バティカン公会議の「教会憲章」には次の点も明らかにされてあります。「信者の総体は信仰において誤ることができない。この特性は『司教をはじめとしてすべての信徒を含む』信者の総体が信仰と道徳の事からについて全面的に賛同するとき、神の民全体の超自然的な信仰の感覚を通してあら

される宗教的事実を深く研究しなければならぬという理由です。このような研究がなされれば、伝統を誇る宗教的価値そのものと、それらの価値が確立する社会的絆を十分に考慮することになり、ひいては、将来の文明が魂を保つことができるのです。聖書を読むと詩篇作者の確信が見られます。「主が家を建てられないなら、それを造る者の働きは空しい。(詩篇127:1)(…)」

り去るのが福音の使信なのです。外国人が信仰と共に持ち込んだある種の習慣だけでなく、みなさん方の間に見られるある種の習慣や制度についても、このような義務を果たさなければなりません。さらに神の福音は、全てよきもの、高貴なもの、真なるもの、正義にかなうものが、最良のものを与えるよう救い、刈り込み、広げる、つまり(清めかつ高め)なければならぬのです。(…)」

# 不変の教え

## 将来の恐れと希望

### 若い力で困難に立ち向かおう！

これから皆さんと考えてゆく事柄の一つとして、若い人々を対象に行なわれた最近の調査についてお話ししたいと思います。

最初の質問はこれです。「将来に対してどのような恐れと希望を抱いていますか。」

皆さんの生きていく時代にも難点や問題がない訳ではありません。例えば、本ものの道徳価値の危機、安全の欠如、経済問題、就職難、不道徳な風潮、不法行為、非行、種々の濫用や操作、宗教への無関心など、数えあげれば切りがないほど。

こういった難しい状況を目の前に突きつけられると、人はた易く誘惑に屈して目をそらしがちになります。自分本位になって自己の殻に閉じこもり、アルコールや麻薬、セックス、それに疎外や憎しみ、暴力を説くイデオロギーに、逃げ場を求めかねない有様です。

このような状況に直面しても、それにふりまわされることなく希望を保たなければなりません。人生を受け入れられている人なら当然のこと希望をもたぬわけにはいかないはず。言いかえれば、現状のうち勝つ希望、現在より一層宗教的、社会的、人間的に恵まれた将来を築く希望、今よりも一層兄弟愛にあふれ、正しくて平和、誠実で人間らしい世界に住む希望を保つべきだということです。

厭世主義の影響をすっかり払いのけるためには、よりキリスト教的で人間らしい社会の建設によることでみずから身を投じる態度が必要になります。愛の文化が支配し、現世での使命と永遠の召しだしとが現実となる社会を建設しなければならぬのです。

未来に対する皆さんの恐れと希望は、たびたび皆さんの口をついて出る次の質問に要約されています。「私の人生にはどんな意味があるのか。」

このように問いかけて、全人格を包み込む現実について考えるのは当然でしょう。というのも実際には、この種の根本的な問いに対する答えは多様であり、時に矛盾を生じることもあるからです。憎悪と暴力、物質主義、快楽主義、利己主義、全体主義などの提唱者はいつの時代にもいるものです。しかも彼らは何の解決ももたらしてくれません。あげくの果てには皆さん方のもっとも気高い抱負さえも裏切って、空しさを残すばかり。

先の質問に対する答えは、みなさんの存在そのもの、神の似姿として造られたみなさんの中に見つかるはずで、答えはキリスト教の信仰の中にあるのです。信仰ははっきりとこう教えています。みなさんは永遠の生命に召されている、神のみ心により、神の子、キリストの兄弟となり、キリストへの愛から兄弟愛の輪をひろげるよう召されている、と。

キリストこそ、みなさんの問いに対する答えです。キリストは、たえず人を助けよ、人のために自らを捧げよとお教えになる。これは聖書にあらわれる言葉です。万一人がそう言わなければ、神への務めに背くのみならず、真理を知る権利をもつみなさん方をも欺くことになるでしょう。

次の点を忘れないでください。みなさんは神の似姿ですから神を理解することができま

す。それゆえ神は、みなさんに幸せと冠を与えるご自分の生命に与れとおおせになるのです。神への道と神との関係は、みなさんの存在の最も深い所に刻みこまれてあります。つまり、宗教性とは人間性に外から付け加えられたものではなくて、人間性そのものの中心となることであるのです。

神を知り宗教生活を営むとは、みなさんの知性を真理でみたとすこと。何よりも神を愛し、自分と同じように隣人を愛して信仰生活を営むとは、みなさんの意志を善でみだし、もてる才能を十分に活用することです。

教会はなにをすべきか  
調査の二番目の質問は次の通りです。「この国の状況に対して、教会は何をすべきか。」これにはさまざま返答がありました。しかし何よりもまず最初に申し上げたいのは、教会がとりわけみなさん方若い人たちの力を期待しているということです。教会は、つねに思いやり深く寛大で、いかなる努力も高潔な犠牲をもいとわない若人に期待をかけています。

というわけで、効果的な働きができるためには皆さんがばらばらであってはなりません。信徒使徒職の活動にせひ加わってください。そうすれば、みなさん自身が教会となり、教会のすることを実行するための具体的な道をみつかることでしょう。(…)

人格を形成するため、教会以上にふさわしい場がほかにあるでしょうか。教会で、みなさんは神のお言葉の導きを受け、人生の意味を教わります。(…)

教会はまた、正義と真理、あらゆる種類の罪への闘いを促す力として働いています。それゆえ教会は、社会教育が教える諸々の規範を通して、より正しい社会建設のための指導を与えるのです。若い人たちは、実行に移すことができるためにこの教えを字ばなければなりません。(…)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

### 教皇はみなさんの友

調査のもう一つの質問は「教皇をどう思うか」でありました。ここでみなさん方にお礼を申し上げたいと思います。ほとんどの若者が、教皇は友であると答えてくださいましたから。全くその通り。教皇はみなさんとみなさんの望みをよく知っている友人です。それゆえ教皇は若い人たち、すなわちみなさん方を信頼して、こう申し上げたい。

若いみなさん！ 真理のまほろしにすぎないものに向かうような生き方はしないでください。若さを損うだけですから。若さとは、消極的な姿勢や怠惰に負けたりせずに、どんなに苦しくとも根気づよい努力を絶やすことなく崇高な目標に到達することです。

若さとは、現実から目をそらすことではなく、因襲的な偽善を拒み真理を意欲的に実行すること。若さとは、自分本位に楽しみを求めるのではなく、絶えず人々に奉仕すること。若さとは、革命でも暴動でもなく、自己の献身と平和的な手段によって、より人間らしい兄弟愛にあふれた分かちあいの社会建設のために努力することです。

過去と比べるなら若さは現代性であります。未来に比べれば、若さは希望であり発見、そして革新であるのです。(…)

## ヨハネ・パウロ二世 教皇様の声 年間購読者募集中！ (1月~12月)

■教会でまとめて、お申込みの場合  
教会で2部以上まとめてお申込みになると送料が無料になります。年間購読料は800円です。教会名・ご担当名・部数を明記の上、お申込ください。

■個人で直接お申込みの場合  
1,300円(年間購読料800円+送料500円)を郵便振替にてお送り下さい。

郵便振替 神戸 3-72393